

# 教 育 研 究 業 績

氏名 田代 琴美

学位：心理学（修士）

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
心理学	発達心理学・教育心理学	
主要担当授業科目	心理学A、教育心理学、発達心理学Ⅱ、カウンセリングと面接演習B、 発達環境のアプローチA・B、子ども研究法A・B、子ども学基礎演習A・B	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 1) ICTを活用した学生との双方向の授業	令和3年4月～令和4年3月	①駒沢女子大学の非常勤講師として、「心理学」で実践した。コロナ禍のため、完全なオンデマンド授業であったが、看護学生の基礎科目として取りこぼしのないように双方向のやりとりを工夫した。必ず全学生から授業に関する感想や質問を求め、翌授業でそれらに回答する授業通信を配信した。これによって、オンデマンド授業ながらも学生が教員に質問し、教員がそれに回答するといった双方向のやりとりを実践し、理解度を深めることができた。 ②駒沢女子大学の非常勤講師として、「コミュニケーションの心理学」で実践した。オンデマンド授業の中でコミュニケーションを育んでいくために、毎回一人で行えるワークシートに取り組んでもらい、その内容を授業動画にて共有した。それによって、別々の場所から参加している学生でも様々な意見があることを理解し、今後の学生生活に向けて役立つそうだという感想を得ることができた。
2) 授業を活用したキャリア教育	令和4年4月～現在に至る	①駒沢女子大学の非常勤講師として担当している「自己分析の心理学」では、就職活動に活用させるだけに留まらず、過去から現在を見つめ直すことによって自己を受容し、未来をより良く生きていくための助けとして自己分析を活かしていけるように自分自身と向き合う時間が取れるよう工夫している。学生からは、「就活のために受講したが、自分の人生を考える時間になった」などの声が得られた。 ②駒沢女子大学の非常勤講師として担当している「セルフプロデュース論」では、15回の授業で自分を理解する・自分に合うものを探す・自分の強みを伸ばすといったセルフプロデュースを考えながら、なりたい自分になるといった自己実現を目指す。多様なワークを行い、ペアやグループ単位での実践を通して、自分を表現することや他者に魅せることを練習している。学生から「就職活動の面接前に受講して良かった」などの声が得られた。
2 作成した教科書、教材 1) 協同出版 教員採用講座テキストの校閲	令和2年4月～令和2年12月	「神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市対策予想問題演習講座」、「東京都対策予想問題演習講座」、「武蔵野大学教員採用試験対策講座」のテキスト作成のために、内容の確認及び追加、修正を行った。
2) 保育者養成課程で使用する教科書（子ども理解・幼児理解、保育・教育の方法と技術）を作成に携わる	令和3年4月～令和4年12月	保育者養成課程で使用する教科書2冊の出版に関わった。本文を執筆するだけでなく、スケジュール管理や原稿の回収などの取りまとめを行った。また、視覚的にわかりやすい教材にするために、章ごとに内容をまとめた動画を作成し、QRコードからその動画に飛べるように工夫をした。この動画作成においても、編著者とともに中心となって携わった。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 令和6年度横浜子ども専門学校における学生アンケート	令和7年3月	前任校における学生アンケートでは、「教員は学生の名前を覚えてくれていると思うか」という項目において、前期から後期にかけて評価が上昇した。記述内容からも親しみやすい教員として認識されている傾向が見られた。また、授業に関しては「わかりやすい」と自由記述欄に書いてくれる学生が複数名いた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許 1) 中学校教諭一種免許状（社会）	平成27年3月	平26中1第11584号
2) 高等学校教諭一種免許状（公民）	平成27年3月	平26高1第14793号

3) 高等学校教諭専修免許状（公民）	平成 29 年 3 月	平 28 高専第 1029 号
4) 公認心理師	令和 3 年 3 月	第 37245 号
5) 保育士資格	令和 3 年 3 月	神奈川県－10937
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 児童相談所内にある一時保護所での実務経験	平成 27 年 6 月～平成 29 年 3 月	一時保護所にて小学生から高校生までの子ども達の学習指導やメンタルケア等を行った。
2) 横浜国立大学美術のつまずきの研究拠点における共同研究	令和 7 年 4 月～現在に至る	横浜国立大学の伊東一善助教が行っている美術のつまずきの研究拠点において心理学の専門家として、「AI 運動分析による空間認知のつまずき要因の解明と介入効果の検証」をテーマにした共同研究に参加している。
3) 野間教育研究所の兼任研究員	令和 7 年 4 月～現在に至る	教育心理研究部門の「感情を耕す」研究部会において、兼任研究員として活動を行っている。
4 その他		

研 究 業 績 等 に 関 する 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 イラスト版子どもの感情力をアップする本 自己肯定感を高める気持ちマネジメント 50	共著	平成 31 年 3 月 30 日	合同出版	幼児から行うことができ、学校や園の中で教師が簡単に取り組むことができるソーシャルスキルを 50 個集めたワークブックである。ポジティブ心理学やマインドフルネスを基に p. 88-p. 91 「34 周りの音に気づこう」、「35 ゆ～っくり呼吸しよう」のワークの作成を担当した。B5 版全 128 頁 監修：渡辺弥生、編著者：木村愛子 主な執筆者：小林朋子、 <u>田代琴美</u> 、他 18 名
2 保育・教育の方法と技術－Visual Aid ビジュアル エイダー	共著	令和 4 年 5 月 1 日	大学図書出版	幼稚園教員養成・保育者養成課程での教育の方法と技術に使用できる教科書である。p. 110-p. 115 第 12 章保護者・地域との連携と保幼小接続 「おうちの人、まちの人といっしょに！」一様々な連携のかたちを執筆した。この章の付録として、さらに学びたい人向けに QR コードから飛ぶことができる教科書の内容に関連した動画の作成も行った。B5 版全 144 頁 編著者：阿部アサミ、小林祥子 主な執筆者： <u>田代琴美</u> 、他 11 名
3 子ども理解・幼児理解－Visual Aid ビジュアル エイダー	共著	令和 4 年 12 月 28 日	大学図書出版	幼稚園教員養成・保育者養成課程での幼児理解の理論及び方法などで使用できる教科書である。p. 116 -p. 119 第 15 章発達の連続性と就学への支援の前半部分を元幼稚園教諭の助言を受けながら執筆した。こちらもこの章の付録として、さらに学びたい人向けに QR コードから飛ぶことができる教科書の内容に関連した動画の作成も行った。B5 版全 128 頁 編著者：阿部アサミ、小林祥子、利根川彰博 主な執筆者： <u>田代琴美</u> 、他 16 名
(学術論文) 1 児童期における感情コンピテンスと対人交渉方略	単著	平成 30 年 10 月	法政大学大学院 紀要 81 号	認知的な側面から問題解決行動を捉えた対人交渉方略に、感情的な側面を包括的に捉えた感情コンピテンスがどのような影響を与えているのかについて検討した。小学 3 年生から 6 年生を対象に質問紙調査を行った。その結果、感情コンピテンスが高い子どもの方がより相手のことを考えた方略を生み出すが、高い感情スキルを有していても、必ずしも最善な方略を選択するとは限らない可能性が示唆された他者のことを考える子もいれば、他者優先的な傾向があっても自分の感情本

2 児童期における自己調整行動の発達と感情表出	単著	令和元年10月	法政大学大学院紀要 83号	位で表出する子もいた。論文記載：p. 57-64 児童期における自己調整行動の発達と、それに感情表出がどのように関連しているかを検討した。小学生を対象に3つの場面を用いてインタビュー調査を行った結果、自己調整行動において自己優先的な傾向がある子どもでも感情を表出する際に他者へ配慮する児童もいれば、他者優先的な傾向がありながらも自己の感情本位で表出する児童もみられた。ここから必ずしも自己調整行動の傾向が感情表出に反映されるわけではないということがわかった。論文記載：p. 31-39
3 造形活動における「つまずき」構造の位置づけと教育的支援の可能性-質的統合法 (KJ法) による分析- (査読付)	共著	令和4年3月	美術教育 306号	保育者養成校の410名の学生を対象に、今までの図画工作や美術の授業でどのようなつまずきを感じたかといったことについて尋ね、造形活動におけるつまずきを明らかにすることを目的とした。KJ法を発展させた質的統合法を用いたところ、「自己効力感」「触発」「技能」「作品」「内的要因」「外的要因」の6カテゴリにまとめることができた。さらにこの6カテゴリについて、それぞれ教育支援の可能性についても提案した。論文記載：p. 8-17 主な担当箇所：研究計画、方法、結果、図表の作成 著者：伊東一誉、赤羽尚美、 <u>田代琴美</u>
4 造形活動における「つまずき」要因の検討-自己評価、他者意識、身体性の関連- (査読付)	共著	令和4年3月	美術教育学研究 54号	保育者養成校の学生92名に質問紙調査を行い、造形活動における苦手意識の潜在的な要因(自己評価、他者意識、身体性の困難さ)とその関係性について検討した。KJ法により身体性の困難さは「手先の不器用さ」「触覚」「姿勢・バランス」に集約できた。また分散分析の結果、身体性の困難さが低い群よりも高い群において自己評価が低いことが明らかになった。ここから、身体の使い方が造形活動に影響していることがわかった。論文記載：p. 33-40 主な担当箇所：研究計画、方法、結果、図表の作成 著者：伊東一誉、赤羽尚美、 <u>田代琴美</u>
5 美術表現の創作プロセスにおけるつまずき要因の構造分析-自己評価と他者参照に基づくつまずきと苦手意識- (査読付)	共著	令和5年3月	美術教育 307号	描画活動と工作活動それぞれにおいて、自己評価、他者参照、つまずきといった要因の構造を検討した。質問紙を用いて、保育者養成校に通う410名の学生に調査を行った。つまずき尺度の因子分析において、描画は工作と異なり、姿勢の保持などの基礎感覚が抽出されなかった。一方で、共分散構造分析の結果、自己評価が低い人ほど、つまずきを増長させる直接的な負の影響があることがどちらの活動においても共通してみられた。論文記載：p. 8-17 主な担当箇所：研究計画、方法、結果、図表の作成 著者：伊東一誉、赤羽尚美、 <u>田代琴美</u>
6 幼児期から青年期に至る描画表現のつまずきの検討-意欲の変化に見るつまずきの時期と要因 (査読付)	共著	令和5年3月	美術教育学研究 55号	絵を描くことについて、いつ頃から苦手意識を持っているのか、保育者養成校の学生310名を対象に質問紙調査を行った。幼児期から現在までを振り返ってもらい、描画への意欲を尋ねたところ、意欲低下のタイミングから10パターンに類型することができた。ここから、小学生の時期に意欲が低下する人は全体の4割を占め、その後意欲が上がる可能性は他のパターンよりも低いことがわかった。論文記載：p. 41-48 主な担当箇所：研究計画、方法、結果、図表の作成 著者：伊東一誉、赤羽尚美、 <u>田代琴美</u>
7 音声からの他者感情理解と共感性との関連 (査読付)	共著	令和5年12月	教育心理学研究 71巻第4号	高校1年生317名を対象に、音声からどのように他者の感情を理解するのか探索的に検討とした。喜び、悲しみ、怒りの音声刺激に対して選択肢と自由記述で感情を回答させた。その結果、選択肢では悲しみの正答率が低かったが、喜びと怒りは正確に判断できていた。自由記述をもとにした計量テキスト分析では、喜びと怒りに近似性がみら

8 描画者の「見る」行為に着目した能動的な調整活動—美術系学生のデッサン観察の時間見本法による分析— (査読付)	共著	令和6年3月	美術教育学研究 56号	れ、喜びとして他者が発話していた声を怒りとして受け取る場合が少なくない可能性が示唆された。論文記載：p.291-304 担当部分：共同研究のため、抽出不可能。著者：翁川千里、 <u>田代琴美</u> 、岩城美良、大森美香、渡辺弥生  描画者が感じる困難さとそれに対する能動的な調整活動を見るという行為に着目して検討した。美術系の大学生 9 名を対象に時間見本法を用いてデッサンの様子を撮影した動画を分析し、併せて質問紙調査も行った。その結果、描画者の困難さは形を捉えると細部を描き込むに集中し、身体運動を伴いながらよく見るなどの能動的な調整活動がみられ、時間内に作品を仕上げようとする調整活動が働いていることがわかった。論文記載：p.25-32 主な担当箇所：研究計画、方法、モチーフ・デッサンの手順に関する分析と図表の作成 著者：伊東一誉、赤羽尚美、 <u>田代琴美</u>
9 描画姿勢と空間認識の歪みがモチーフの描写に与える影響—「形をとる」段階のつまずき要因の検討— (査読付)	共著	令和7年3月	美術教育学研究 57号	モチーフ・デッサンにおける描画姿勢の変動が正確な形の描写にどのような影響を与えるかについて実技調査を行った。美術系学生7名を対象に1時間のモチーフ・デッサンを実施した。そこから得られた分析データによって、参加者の描画姿勢と作品評価との関連が見出された。特に、「全体形状表現スキル」の評価項目が描画姿勢と関連し、姿勢の傾きから空間認識の歪みが生じ、正確に形をとらえることを阻害している可能性が示唆された。論文記載：p.25-32 主な担当箇所：研究計画、方法、結果、図表の作成 著者：伊東一誉、赤羽尚美、 <u>田代琴美</u>
10 保育者養成校における科目「情報機器の操作」に関する研究—短期大学通信教育課程のシラバス分析を中心に— (査読付)	共著	令和7年3月	小田原短期大学 研究紀要 55号	保育者養成を行う短期大学通信教育の ICT 教育について、教科書(教材)の分析を中心に考察したものである。今後ますます技術の進展が見込まれる ICT 教育においては ①カリキュラム設計、②シラバス策定を含む授業設計、③教科書(教材)選定、④教員等への研修の充実が重要性を有するということを通信教育研究の視座から明らかにした。論文記載：p.93-102 担当部分：共同研究のため、抽出不可能。著者：山鹿貴史、松原詩緒、 <u>山崎輝美</u> 、 <u>岩羽紗由実</u> 、 <u>大田美郁</u> 、 <u>森志津</u> 、 <u>田代琴美</u> 、 <u>張愛子</u> 、 <u>田中愛誠</u> 、 <u>寺尾謙</u>
11 幼児期における感情制御方略の有効性の認知の発達 (査読付)	単著	令和7年3月	乳幼児教育・保育者養成研究 5号	幼児期にはどのような感情制御方略を用いているのかについて、その有効性から検討した。幼児 53 名の自発回答を分析した結果、感情制御方略として6カテゴリが抽出された。また、あらかじめ設定していた4方略(慰め・感情を吐き出す・気晴らし・問題解決)においては年少においても感情を吐き出す方略は感情を制御するために効果的でないと考えられ、年齢の高い子どもでは慰め方略が有効だと発達的に示された。論文記載：p.107-120
12 幼児の感情制御方略に対する保育者の関わり—SCAT 分析によるインタビューデータの検討— (査読付)	単著	令和7年5月	関係性の教育学 24号	幼児の非認知能力を育むために保育者はどのような関わりをしているのかについて、保育者のインタビューデータを用いて検討した。ここでは、保育者 5 名に対して幼児がネガティブ感情を表出した際にどのような関わりをしているかを尋ねた。その結果、共通して自分の気持ちを言葉で伝えられるようになるということを重要視しており、今後保育者養成においてその支援のやり方を考えていく必要性が見出された。論文記載：p.101-115
13 保育者養成校における科目「情報機器の操作」に関する考察—短期大学通信教育課程の教科書分析を中心に— (査読付)	共著	令和7年6月	令和6年度日本通信教育学会研究論集	保育者養成を行う短期大学通信教育の ICT 教育について、「情報機器の操作」の教科書とシラバスの分析を中心に考察した。通信教育の特色や独自性はみられなかったが、シラバスには教科書ではみられない保育現場を意識した内容が示され

<p>14 描画における空間認識の歪みと姿勢の関係—モチーフ・デッサンの実技調査における熟達者と非熟達者の比較— (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>令和 8 年 3 月</p>	<p>美術教育学研究 58 号</p>	<p>ていた。これは各教員の力量に依る部分が大きいと考えられた。論文記載：p. 19-36 担当部分：共同研究のため、抽出不可能。著者：山鹿貴史、寺尾謙、岩羽紗由実、大田美郁、<u>田代琴美</u>、田中愛誠、張愛子、松原詩緒、森志津、山崎輝美</p> <p>描画の学習場面におけるつまずき(形を捉えることができないこと)について、熟達者と非熟達者の比較から検証を試みた。1時間のモチーフ・デッサンを分析した結果、非熟達者の描画姿勢は常に下向きの傾向にあり、モチーフから目が離れやすく首に負荷がかかる等の特徴が得られ、描画姿勢の傾きが空間認識の歪みにつながっていることが示唆された。論文記載：p. 17-24 主な担当箇所：研究計画、方法、結果、図表の作成 著者：伊東一誉、<u>田代琴美</u></p>
<p>(その他)</p> <p>1 児童期における友人関係の感情表出とソーシャルスキルの関連 (ポスター発表)</p> <p>2 児童期における感情コンピテンスと対人交渉方略の関連 (ポスター発表)</p> <p>3 感情研究から知る子どもの道徳的行動の発達(ラウンドテーブルでの発表)</p> <p>4 Development of self-regulation function in emotional competence (ポスター発表)</p> <p>5 幼児はどの感情制御方略が良いと考えているのか? (ポスター発表)</p>	<p>共著</p> <p>単著</p> <p>共著</p> <p>単著</p> <p>共著</p>	<p>平成 28 年 4 月 29 日</p> <p>平成 30 年 3 月 24 日</p> <p>平成 31 年 3 月 18 日</p> <p>令和元年 7 月 11 日</p> <p>令和 3 年 3 月 29 日</p>	<p>日本発達心理学会第 27 回大会</p> <p>日本発達心理学会第 29 回大会</p> <p>日本発達心理学会第 30 回大会</p> <p>International School Psychology Association</p> <p>日本発達心理学会第 32 回大会</p>	<p>友人との関係性が感情表出とソーシャルスキル(言葉がけ)にどう影響を与えるかについて検討した。小学生 393 名に対して、関係性(仲良し・仲悪い)と他者からの行動(向社会的・反社会的)で 4 場面を作成し、質問紙調査を行った。その結果、6 年生の仲が悪い×反社会的行動では意図的に攻撃的な表出をしていた。学年が高いほど攻撃性を抑制するというよりも、親密でないから怒りを表出しても良いと考えていることが示唆された。発表者：<u>田代琴美</u>、渡辺弥生</p> <p>児童期の子どもの感情コンピテンスが対人交渉方略にどのように影響するかについて検討した。小学 3 年生から 6 年生に感情制御、感情表出、他者感情の理解、自己感情の覚知、共感からなる感情コンピテンスを測り、対人葛藤場面での問題の定義、方略の産出、方略の選択、結果の評価の 4 つを質問した。その結果、対人葛藤場面における問題解決方略では、方略を扱う際に感情コンピテンスの発達レベルが関わるという興味深い結果となった。発表者：<u>田代琴美</u></p> <p>子どもの感情の発達研究を行っている 3 名とともにラウンドテーブルにて、子どもたちの対人場面における正しい行動の決定の背景にどのような感情リテラシーの発達が考えられるのか議論を行った。その中で、私は Display Rules 獲得の背景には自己と他者双方について考える力が関わっているのではないかとこの観点から発表し、他者との対人関係をどのように慮りながら表出する言葉や行動を決定するかについて述べた。企画・司会：渡辺弥生 話題提供者：翁川千里、<u>田代琴美</u>、岩城美良、只浦聖子</p> <p>小学生は対人葛藤場面でのどのくらい自己を優先した行動や他者を優先した行動をするのかを自己調整の観点から検討した。自分がポジティブ感情を抱き、友達がネガティブ感情を抱く時ほどの学年でも他者優先的であった。その一方で、自分がネガティブ感情を抱き、友達がポジティブ感情を抱く時において、低学年では困難でも学年が上がるにつれて他者優先的な行動を取れるようになることが示唆された。発表者：<u>田代琴美</u></p> <p>幼児の感情制御方略の使用において、自分自身の感情を制御することが可能であるといった方略の有効性の認知について、どのように理解をしているか発達的に検討することを目的とした。3 歳から 6 歳児 53 名を対象に個別調査を行った。その結果、年少児から感情を吐き出す方略は有効性が低いと考える一方で、先生に話をする方略は年少児よりも年中児・年長児において効果的であると考えられているという発達の示唆が得られた。発表者：<u>田代琴美</u>、渡辺弥生</p>

6 子どもたちは、言語・非言語コミュニケーションを通してどのように感情を理解しているか、伝えているか？感情コンピテンスの発達(関連団体企画シンポジウム)	共著	令和6年3月6日	日本発達心理学会第33回大会	Social and Emotional Development 分科会が企画するシンポジウムに参加した。ここでは、話題提供者として、音声からの感情理解についての共同研究の成果を発表した。司会：石本雄真 話題提供者：渡辺弥生、岩城美良、翁川千里、田代琴美、池田慎之介、針生悦子、平林秀美、溝川藍 指定討論者：杉本希映
7 Use of Emotional Regulation Strategies in preschoolers in Japan (ポスター発表)	単著	令和6年7月26日	33rd International Congress of Psychology	ネガティブ感情が生起する場面において、3歳から6歳の幼児が感情を制御するためにどのような方略を使用しているか、自発的な回答から分類した。その結果、「問題解決」「気晴らし」「抑制」「わからない」「分類不能」の5つのカテゴリが抽出された。また、対数線形モデルによる分析の結果、場面や年齢による影響はなかったが、「問題解決」「気晴らし」「抑制」は欧米の先行研究と同様の方略が日本の幼児でも用いているということがわかった。発表者：田代琴美
8 Development of Emotion regulation Strategies in Japanese preschoolers in Situations Capturing Emotions on Two Axes (ポスター発表)	単著	令和7年7月19日	46th Annual Conference of the International School Psychology Association (ISPA)	日本の幼児48名を対象に、3場面について快-不快、覚醒度の高低を確認し、感情制御方略の発達について検討した。分析の結果、誕生日場面と金魚場面において状況選択よりも状況修正、注意の方向づけ、反応調整が有意に高かった。ここから、日本の幼児は場面に影響を受けるのではなく、何かあったら周囲の大人に助けをもらう方が良いと考えており、状況修正方略を用いることが有効であると考えている可能性が示唆された。発表者：田代琴美、渡辺弥生

(注) 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。